HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スラブ研究センター図書室の歩み（40周年記念号）
Author(s)	秋月, 孝子
Citation	スラヴ研究, 42, 15-40
Issue Date	1995
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5232
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113386.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

スラブ研究センター図書室の歩み

秋 月 孝 子

1．法学部附属施設の時代（1953～1978）

スラブ研究センターの前身である「スラヴ研究室」* が、旧ソ連・東欧地域の総合的な研究機関として、北海道大学の学内措置により設置されたのは1953(昭和28)年6月24日のことであった。その後1955(昭和30)年7月には「北海道大学法学部附属スラヴ研究所」(1955年7月1日～1956年1月31日)(1)として官制化され、さらに「法学部附属スラブ研究室」(1956年2月1日～1962年3月31日)、「法学部附属スラブ研究施設」(1962年4月1日～1978年3月31日）と名称を替えながら、25年の歳月をへて1978年（昭和53年4月1日）には独立した研究機関として「学内共同教育研究施設スラブ研究センター」に改組された。1990(平成2)年にはさらに「全国共同利用施設スラブ研究センター」となり、1995(平成7)年は丁度創立40周年にあたる。

スラブ研究センターは、創設以来スラブ地域（旧ソ連・東欧地域）の学際的総合研究を目的とし、旧ソ連・東欧諸国（旧チェコスロヴァキア、ハンガリー、ポーランド、ルーマニア、ブルガリア、旧ユーゴスラヴィア、アルバニア）の歴史・文学・政治・経済・国際関係・法律に関する研究を行なっている。それはまた研究活動のほかに、幅広い研究交流、文献・資料の収集、資料情報活動によって大学の枠を越えたスラブ研究の中心となることを目指している。センターの図書室も、このセンターの学際的総合研究を支えつつセンターの歴史と共に歩み、今日に至っている。

準備期（1953～1955）

スラブ研究関係資料の収集は、わが国における旧ソ連・東欧地域を含むスラブ研究の発展と密接に結びついている。戦前にわが国で組織的なソ連研究を行なっていたのは、満鉄や外務省関連の諸機関にすぎず、大学ではロシア文学や語学の研究以外はほとんど行なわれていなかった。このような過去の歴史におけるソ連・東欧研究の片寄りは、当然のことながらこの分野の資料収集にもあらわれていた。とくに戦前は自然系の総合大学であった北大の場合は、スラブ関係の文献は皆無にひとしかった。このような北大に設置された「スラヴ研究室」は、その当初から資料収集を重要な活動の一部としなければならなかった。

「スラヴ研究室」が設立された1953(昭和28)年は戦後間もなく、予算的にも窮迫した時代であったが、アメリカのロックフェラー財団から図書購入費として500万円(2)が寄贈され、国内外の古書市場からもかなりまとまった収書が可能となった。最初の研究員となった木村彰一教授、鳥山成人助教授の両氏はスラブ研究に必要な基本図書リストを作成し、それにもとづいて、米国議会図書館スラブ部門部長ヤコブソン氏(Sergius Yakobson)（有

名なスラブ言語学者ヤコブソン博士の令弟）が発注をおこない、絶版などで入手不能なものは類似のものにふり替え、それらがスラブ研に寄贈の形式で収められたようである(3)。それらの大部分は第2次世界大戦の戦中・戦後にかけて刊行された英・独・仏語の文献であるため、わが国では入手できなかったもので、「スラヴ研究室」にとってはコレクションの最初のまとまった核となった(4)。当時の収書の基礎カードを見ると、単行本・雑誌ともに基本的な資料が精選して集められており、マイクロフィルムによる補充も始められていた(『マイクロフィルム所蔵目録 1953－1973』参照)。

「スラヴ研究室」は、創立から2年間(1953～1954)は、制度上の機関ではなかったので、研究室の運営は文部省からの特別の科学研究費によりまかなわれていた。科学研究費補助金による機関研究のテーマは「ロシア及びソヴェト社会における中間層の役割に関する研究(第一期ナロードニキ関係資料の収集及びその研究)」で、研究代表者は木村彰一教授であった。この機関研究報告が1部残されている。それによると1953～1954(昭和28～29)年の2年間は、毎年130万円配分され、研究設備及び支出経費の内訳リストが添付されており、それを見ると当時受入れられた本の1冊1冊に出会うような思いがして興味つきないものがある。さらに今筆者の手許に残されているメモ的資料は、資料収集のための基本的な文献カード、リストの作成準備に費やされたエネルギーが大変なものであったことを窺わせる(5)。その頃の予算の支出管理は文学部の会計掛でおこなわれていたとのことである(6)。爾来スラブ研の図書費は、今日に至るまで科学研究費が重要な役割を果すことになる。

草創期（1955～1970）

1955(昭和30)年7月スラヴ研究室は官制上の研究機関となり、法学部に附属することになった（1955年7月1日～1956年1月31日の期間は「スラヴ研究所」、1956年2月1日～1962年3月31日の間は「スラヴ研究室」と称していた)。建物としてはそれまで「北方文化研究室」が使用していた、もと札幌農学校の昆虫学講堂の一部があてられ、石造りの昆虫標本室が書庫となった。官制化とともに専任の研究員・助手・事務職員の定員も認められ、研究体制も整い、1957(昭和32)年には『スラヴ研究』の第1号が発刊された。当時の事務担当者として、助手の更科道子氏、事務職員の豊田久馬彦氏と芳賀柳二氏の3人が配置され、図書の発注・受入・整理・貸出業務に携わっていた。当時北大では、各学部で支払われた図書は、支払い内訳と各学部の物品管理官の下で付与された物品番号票を付して附属図書館に送られ、そこで目録・分類が行なわれていた。しかしスラブ研では、図書の大部分がロシア語のこともあって、スラブ研で法学部の物品として登録し、目録・分類も更科・芳賀両氏によってなされていた。筆者は高校時代からの友人であった更科道子助手を訪ねてしばしばスラブ研究室に出入りしていたので、木綿の風呂敷いっぱいにロシア語の本を包んで運んできていた、ナウカ社札幌営業所の荒木五郎氏（のちナウカ社社長）のことや、冬には木造部分の建物が深い雪のなかにすっぽりと埋もれ、中でダルマストーヴを燃やしていた狭い事務室の光景を今でも憶えている。

1960(昭和35)年にチェコスロヴァキア大使が北大を訪れ、杉野目学長自ら定山渓に招待し、鳥山先生も同行したと仄聞しているが、この時チェコ語の歴史・言語学に関する図書

が多数スラブ研に寄贈されたとのことである。このことについての記録は、スラブ研には残されていないが、『北海道大学一覧』に「本施設の存在と研究成果は、米国以外からも注目され昭和三十五年には、チェコスロヴァキアから約二百点の学術誌と図書の寄贈を受けた」[7] と記されている。筆者が1966年8月スラブ研に移ってきたとき、当時の担当者からその現物の一部を見せてもらった記憶がある。それらは基本的な歴史資料集なども含まれており学術的に貴重なものであるとの印象を強く受けた。これらの本は現在でもよく利用されている。鳥山先生のお話では、この時のチェコスロヴァキア大使は優れたスラヴィストであったとのことで、寄贈図書の選択も大使自身の手によったものかもしれない。

「スラブ研究室」は1962(昭和37)年に「スラブ研究施設」と改称され、1966(昭和41)年には法学部研究棟の新築にともない、事務室と研究室はその2階部分に移転した。その際にスラブ研究施設の蔵書の大部分は隣接する中央図書館の書庫3層に移され、それ以後図書の貸出業務は図書館の管理に委ねられることになった。センターの歩みを省みるとき、木造の小さな建物を利用していた10年間は、古きよき時代であったと思われる。

スラブ研の蔵書は、創立から20数年間はあまり増えることがなかった。年間の増加冊数は平均1,000冊前後で、1975年4月現在の蔵書数は、19,081冊(洋書17,606、和書1,475冊)であった。その大部分はスラブ研設立の1953年以後の出版物である。1966年には創立10周年を記念して『欧文図書目録1953〜1965』が刊行された。B5版2段組み235ページのタイプ印刷である。欧文と露文に大別され、デューイの10進分類によって分類されているが、索引がないのは残念である。当時図書室は、設立当初の更科道子助手と豊田久馬彦事務官が去り、芳賀柳二、大垣徇、成田京子の3人の事務官で運営されていた[8]。そのほか出かず子助手が研究のほか紀要の編集、シチェドリン図書館との図書交換業務、マイクロフィルムの整理(創立から1968年までのマイクロフィルムを検収しカードを作成)に従事していた。

筆者が芳賀柳二氏の後任として研究施設に来たのは、1966年8月のことである。爾来30年スラブ研究施設とともに歩むことになるとは予想もしなかった。スラブ研究センターの図書業務は創立以来助手ポストの要員により分担されてきた。このことは外国のように、スラブ諸国の図書を扱う仕事は「選択から整理」に至るまで、かなりの専門的知識と能力が必要なので、教官ポストをさく必要があるという考えに基づいていたようである。したがってスラブ研では、更科道子(1956年6月〜1962年3月)、佐野優子(1969年4月〜1972年8月)、坪谷七魚子(1972年9月〜1976年5月)、松田潤(1976年4月〜)、大塚恵理(1986年5月〜1988年3月)、小竹史緒(1988年4月〜1989年3月)、杉浦和子(1989年4月〜1990年3月)と相次いで助手ポストが図書業務をカヴァーしてきた。

この時期の研究施設の年間受入冊数は1,000冊たらずとはいえ、乏しい図書購入費を補っていたのは、文部省の科学研究費補助金であった。この研究費は毎年自動的に交付されるとは限らない不安定なものであったので、図書購入計画に大きな影響を及ぼした。幸いなことに兼任研究員の協力によって共同研究が組織され、1953年以来40年間にわたり、ほぼ恒常的にいろいろな種類の科学研究費が交付されて現在に至っている。1966年から1975年の10年間にわたる費目別受入図書冊数表は、この間の事情を物語るものである[9]。

1968年から1969年にかけて全国に吹き荒れた大学紛争の嵐は北大にも押し寄せ、1969

年の北大紛争は法学部に間借りしていた小さなスラブ研究施設にも及んだ。同年5月の本部封鎖に始まり、7月に図書館、8月17日には文系4学部の校舎が封鎖された。この年の秋は、研究施設の事務室も法学部の事務室とともに医学部附属病院旧看護婦宿舎に間借りして過ごすことになった。恒例の週1回の事務会議の開催もままならず、旧市電の通りに面していた旧ナウカ書店の2階や、正門前にあった中屋菓子店の2階などを転々としながら、1週間ごとに研究員と事務職員との打ち合わせの会合が開かれた。10月末文系4学部の封鎖は解除されたが、研究施設のあった法学部研究棟の東側2階は、図書館への通路にもあたっていたため、建物の被害は大きかった。しかしスラブ研の紛失した図書はドイツ語の辞書1冊のみであった。それには封鎖に先だって受入未支払い本などはダンボールにつめて封印し、旧市電通りの小さな雑貨店の倉庫に一時避難するなどの事前の措置をしていたことが役立った。封鎖解除後、被害による紛失図書リストの提出を求められたが、それは他学部と比較すれば被害のうちに入らぬものであった。

過渡期（1970〜1978）

1970(昭和45)年北大紛争が一応解決し、スラブ研究施設は法学部研究棟の2階から3階に移ることになった。同年「北海道スラブ研究会」が設立され、第1回年次総会が開かれた。この研究会は学内外の研究者に開放され、設立25年後の今日まで存続している。

この時期のスラブ研図書室にとっての大きな出来事は、附属図書館との統合問題であった。大学紛争後の時期は大学全体が改革の機運に満ち、そのことは附属図書館の改革の努力にもあらわれた。1970年には今村館長の『大学図書館の未来像 ── その理念を中心にして』という報告書が作成され、「北海道大学改革検討委員会」のI－2専門委員会が「図書館に関すること」を分担することになった。この作業を補助するために委員長（館長）の諮問機関として図書館員よりなる事務改善委員会も発足した。上記の専門委員会は、今村委員長の図書館改善案を討議して、評議会へ送ったが、そこでは自然科学系部局における図書分散の是正、人文社会科学部局図書室の図書館との統合が勧告された。学内組織の中で孤立していたかのように見えた附属図書館は、「北海道大学改革検討委員会」の1つの専門委員会によってはじめて、学内の他の組織と同列の有機的な位置づけが与えられることになったのである。この勧告に基づいて1975年4月には法学部図書室の附属図書館との統合が実現した。

人文社会系図書室と附属図書館の統合問題の目指すところは、その出発点において今村館長の『大学図書館の未来像』をうけ、「大学図書館の教育と研究の基本的な目的の実現と、今後の図書の増加、それにともなう書庫スペースの問題、定員削減・定員不補充等の現実的な諸問題に対処するためにも統合は合理的な措置である」との判断に基づくものであった。当時欠員不補充と定員削減の問題は大学全体に深刻な波紋を引き起こしていた。これこそ附属図書館との統合に際して、いかなる理由よりも周囲に強い説得力をもつものではなかったろうか。法学部図書室の統合の場合も単に法学部側の理由からのみでなく、受入れ側の図書館にとっても9名の定員[10]の移行はこのうえなく魅力的なものであったにちがいない。この問題は、大学紛争直後の1970年から5年の歳月をかけて、今田事務長はじめ当時の歴代の学部長、山畠図書委員、全図書職員の討議の結果、全員の合意のうえ決定

されたものであった。筆者も何度か法学部の統合問題懇談会に出席した。一般には法学部の図書室が統合されるならば、その附属研究施設であるスラブ研の図書室がその決定に従うのは当然と思われていた。しかしスラブ研は、独自に討論を重ね、法学部とは独立の行動をとることになった。

スラブ研図書室の附属図書館との統合問題は、解決を見出せないまま今日に至っており、現在のスラブ研究センターにとっても大きな課題となっているので、その経緯を簡単に説明しておきたいと思う。スラブ研図書室が法学部図書室と同時に統合しなかった理由は、附属図書館との統合に単に反対するのではなく、人文・社会系図書室全体の統合を前提に、スラブ系の文献を一括して取り扱うスラブ部門を附属図書館に設置するという理念に基づくものであった。ある意味ではこれこそ、今村館長の「大学図書館の未来像の理念」に合致するものではなかったろうか。

1970(昭和45)年春、法学部図書室の附属図書館との統合問題の動きが具体的に始まりつつあることを仄聞した外川図書委員は、上記の考えにもとづいて「図書館・法学部図書の合体について」と題する文書を附属図書館に提出した。しかしこれにはなんらの回答もされなかった。スラブ研では慎重な討議の結果、施設長以下全員の出席のもとに図書館の部・課長、担当掛長と統合問題懇談会を開いた。スラブ研側からは、スラブ研図書室と図書館の統合を「図書館改善案」の理想的なモデルとすべく、スラブ部門（Slavic Division）設置の提案がなされた。それはスラブ研の資料を核に法・文・経・教育の各学部のスラブ関係資料を一貫して収集・整理し、参考業務を行なうことを目的としており、この提案が受け入れられるならば喜んで統合される用意がある旨の説明がなされた。スラブ研側はさらに統合に際しての附属図書館側の具体的な青写真の提示を求めた。しかし附属図書館側からは明確な反応はなく、これらについては持ち帰って後ほど回答することになった。しかしその回答はついに得られず、スラブ研図書室の統合問題についての図書館側との話し合いは、そのまま中断された。

その後4年を経て、スラブ研は附属図書館から1974(昭和49)年4月1日付け文書で突然「人文・社会系学部附属図書館書庫内図書等の管理について」[11]という通知を受取った。これに対して、外川施設長は同年4月23日付け文書で「法学部図書業務を統合（集中化）する件については、スラブ研究施設は、法学部とは別に独自の立場から附属図書館と協議する」旨を伝えた。

法学部図書室の統合問題は、発端となった1970年以来薮・石川の2学部長時代をへて、小暮学部長のとき、すなわち1975(昭和50)年3月、「法学部図書掛の附属図書館への統合に関する必要な事項についての申し合わせ」(法学部図書掛の附属図書館への統合に伴う図書業務等の取扱いに関する確認事項）により終止符が打たれた。法学部図書室の附属図書館との統合問題に精力的に取り組み、自己の論理を貫いたのは今田事務長であった[12]。

1975年4月1日、法学部図書掛は業務の統合化とともに解体し、図書掛職員全員（1名の定員は学事掛に据置くことになった）は附属図書館へ配置換えになり、スラブ研の図書業務と1名の図書定員はそのまま取り残されることになった。1970年に端を発した法学部図書室の統合問題が決着を見るまでに、筆者は法学部図書職員の「統合」をめぐる討論の内容にいささか絶望的になっていた。そこで自らの見解を示すために、『スラヴ研究』の「図

書室だより」に執筆したのが拙稿「大学図書館の集中管理制をめぐって」である(13)。

1971(昭和46)年には『マイクロフィルム所蔵目録1953～1971』(札幌、北海道大学法学部附属スラブ研究施設、1971)が作成された。スラブ研では設立の当初からマイクロフィルムによる文献資料の補充に努めてきたが、単行本や雑誌と違ってその内容を検索するのが困難だったからである。また単行本や雑誌についても、1972年春には、創立10周年を記念して刊行された『欧文図書目録1953～1965』を引き継ぐかたちで、5年の累積版『欧文図書目録1966～1970』(札幌、北海道大学法学部附属研究施設、1972)を、翌1973年には『欧文雑誌目録1953～1973』(札幌、北海道大学法学部附属スラブ研究施設、1973)を相次いで刊行した。後者の目録の特色は2つあり、その1つは雑誌の所蔵巻年次の表示が現物とマイクロフィルムを併せた形でなされていること(マイクロフィルムの所蔵部分はアンダーラインで示されている)、いま1つは誌名の変遷等の書誌情報が豊かであることである。

1972(昭和47)年春、百瀬研究員により、はじめてフィンランド語セミナーが開かれた。5・6人の出席者であったが、当時文学部・言語学科の学生で、現在小樽商大の津曲助教授も参加者の1人であった。スラブ研ではフィンランド語の本や雑誌も受入れられており、最低の文法的知識も必要だったので、筆者も参加したが3カ月で挫折した。同年内外の研究者から久しく望まれていたスラブ関係研究者名簿が『わが国におけるソ連・東欧研究の動向』(14)と題して初めて刊行された。昭和47年度文部省科学研究費補助金によるものである。これは『ソ連・東欧研究者名簿』の初版にあたり、集められたデータの最終編集の任にあたったのは坪谷助手であった。

1973(昭和47)年4月には日本学術振興会の招きでポーランド科学アカデミーからシリジニスキ博士(Jerzy Śliziński)が訪れ、約1ヵ月滞在した。研究テーマは「比較文学の方法論の諸問題」で、彼は8カ国語が読めることを自慢していた。シリジニスキ博士はスラブ研に長期滞在した最初の外国人であった。同年秋には伊東研究員によりポーランド語入門講座が開かれた。これは大変な人気で、参加者は北大のみでなく、他大学からも集まり、参加者の層も多様で、学部学生から年輩の教授にまでおよび、毎回座席が足りないくらいであった。翌1974年には毎週土曜日の午後、会話のレッスンとテキストの講読会がおこなわれた。テキストは19世紀ポーランド思想史で、こちらのほうは参加者が少なかった。その一人は現在群馬県立女子大の岡野恵美子女史であった。さらに継続して1975年には福田ヤニーナさんを招いて会話のレッスンが開かれた。この講習会を通してポーランド語をマスターし、ポーランドに留学する人が続々あらわれた。外川継男、早坂真理、栗生沢猛夫、灰谷慶三、鈴木秀一などの諸氏がそうである(15)。

1975(昭和50)年は創立20周年にあたり、7月クラーク会館でささやかな祝賀会が開かれた。同年12月、北大で国際法の専門家であった和田禎純教授の旧蔵書の1部が、御子息の札幌医大教授和田寿郎氏から寄贈された。洋書98冊、和書102冊、和雑誌5点で、1900年の2・30年代から第2次世界大戦前に出版されたものが多い。内容は専門分野の国際法に限らず、満州問題・植民地問題に関するものも含まれる。1976年には「ソ連東欧研究文献目録」が松田助手により編集され、『スラヴ研究』22号に収録された。1978年以降は『スラヴ研究』から独立し、単独の冊子として発行されることになった(16)。

2．学内共同利用センターの時代（1978～1990）

1978(昭和53)年法学部附属スラブ研究施設は、学内共同教育研究施設スラブ研究センターに改組され、教授定員7、客員教授3（うち外国人2人）のほか多数の学内外の併任研究員を擁する独立した研究機関となった。これまでの25年間にそれほど大きな変化の見られなかったスラブ研究施設の組織に著しい発展がみられたのは、この年の改組以降のことであった。このことは図書予算の面でも大きな変化をもたらした。教官積算校費としての一般経常費の他に、特定研究経費、設備充実費が加わり、かつてないほど豊かな図書費を計上することができた。20年間、年間1,000冊たらずの増加冊数しかなかった図書室に、多数の資料の購入を可能にしたのは、同年12月に何の前触れもなく配分された1,600万円の設備充実費であった。この予算は筆者を忙しさの渦中に追い込んだが、長年購入を望んでいた多くの資料との出会いは、限りない充実感をもたらした。この時購入したものの中には、『ブロックハウス・エフロン百科』(全86冊、1890－1907)[17]、『ソビエト大百科』初版（全66冊、1926－1947)、フーヴァー研究所の『蔵書目録』(全63冊及び第2補巻6冊)、そのほか多数のマイクロフィルムがあった。

さらにこの1978(昭和53)年度に特筆すべきは、文部省の「特別外国図書購入費」により附属図書館に3つの大型スラブ関係コレクションが受け入れられたことであった。それらは「ヴェルナツキー・コレクション」、「ボリス・スヴァーリン・コレクション」、「18世紀ロシア文学コレクション」であり[18]、いずれも北大におけるスラブ関係コレクションの欠落部分を補う貴重なものであった。最初の2つはスラブ研が文部省に申請したものである[19]。このことは文部省も北大の文系図書については、特にスラブ部門を重視していることを示しているように思われた。

同年10月には第1回外国人客員研究員として、カービー氏（E. Stuart Kirby）とドミトリッシン氏（Basil Dmytryshyn）が6カ月滞在の予定で着任した。

1979(昭和54)年には、翌年度の概算要求に対する内示において、情報資料部の設置が認められ、助教授ポストが増えることになった。同年3月には『スラブ研究センターニュース』の第1号が刊行され、1994年12月現在59号に至っている。初号はわずか4ページのタイプ印刷であった。現在のものと比較すると、スタイルは全く変わっていないが、ニュースの量の増大が隔世の感を与える。第2号は同年7月に刊行され、この号に初めて「図書室だより」欄が登場し、それ以来図書に関するいろいろな情報が掲載されることになった。『スラブ研究センターニュース』第2号の「図書室だより」には、故前谷清氏と池田博行氏から「ロシアの交通論関係図書」が寄贈されたこと、また前年度の設備充実費で購入した主な図書が紹介された。この年には特別設備費で「ロシア関係学位論文」1,131点を購入した。さらにこれまで年刊だった『スラヴ研究』が半年刊となり、23号が1979年1月に、24号が同年7月にそれぞれ刊行された。半年刊の形態は4年間（1979～1982）続いたが、翌1983年に欧文紀要 *Acta Slavica Iaponica* が刊行されるにおよんで、1982年10月の秋期号30号をもって、再び年刊出版物にもどることになった。

同年7月には、第1回「日ソ関係の総合的研究」と題するシンポジウムがセンターにお

いて開かれ、このシンポジウム報告は『研究報告シリーズ』第1号(*Slavic Research Center Occasional Paper*)として9月に刊行された。これ以来、年2回開催されるシンポジウム報告の出版が続けられ、1994年12月現在55号に達している。同年9月ハワイ大学のポランスキー女史(Patricia Polansky)が訪れ、「アメリカにおけるロシア語文献の収集について」と題して講演が行なわれた。

この年度の外国人客員はボイター氏(Albert Boiter)、クーシン氏(Vladimir V. Kusin)、ホレツキー氏(Paul L. Horecky)の3氏であった。同年9月に帰国したクーシン氏の後をうけて10月から半年滞在したホレツキー氏は、長年米国議会図書館スラブ部門の部長を勤め、すぐれた書誌を次々と編集刊行して、アメリカにおけるこの分野の第1人者であった(このときは議会図書館を引退し、ジョージ・ワシントン大学の所属であった)。この度の招聘は、スラブ研のコレクション構築のための助言と協力を目的とするものであった。彼は第2次大戦後アメリカに亡命したチェコ人で、スラブ系諸言語に堪能であると同時に、書誌編纂の経験も豊かで、積極的にスラブ研の蔵書の弱点をカヴァーすべく協力を惜しまれなかった。筆者も親しく交わる機会を得て、コレクションについていろいろのアドヴァイスを受け、書誌作成等についても多くのことを学んだ。この半年は筆者にとってかけがえのない有意義な楽しい日々であった[20]。

この頃になると予算の増大に伴い、図書業務も爆発的に増えて現状では処理しきれなくなってきたので、事務補助員1年間の採用を大学当局に依頼した。1978年度に図書業務のために採用されたのは澤田美喜子さんで、翌年その後を引き継いだ沼田清美さんは北大文学部露文科の出身であった。彼女の手になる大量のマイクロフィルム、フィッシュの検収リストは、正確さと分かりやすさの点で類をみないほどみごとなものであり、今も保存されて役立っている。雇用期間はいずれも1年に限られていたが、翌1980年には例外的に再び澤田美喜子さんが事務補助員となった。彼女の後任者は北大露文出身者松崎初江さんで、1981年度はスラブ研で事務補助員の1年間の雇用が認められた最後の年となった。その後は事務補助員ではなく、協議採用による半年間の雇用報告で雇われる臨時用人の形態が主流となった。しかし北大内における事務官の定員削減・定員不補充がきびしさを増すにつれ、臨時用人の雇用も次第に難しくなり、雇用の人数なども厳しく制限された。半年間の雇用期間は、多岐にわたるスラブ系言語の資料をとり扱う図書業務の場合、あまりにも短か過ぎて効率が悪いので、一年の前半は雇用報告で、後半は科学研究費でつないで、全体として通算1年間の雇用を可能にする方法が長い間採用された。特に1981(昭和56)年に概算要求の「第1次基本図書整備計画」が認められ、第2次、第3次と継続されるに及んで、未整理図書は累積する一方であった。この膨大な未整理図書の現状を打開するため本部との交渉の結果、1992(平成4)年4月特別措置として臨時用人の2年間採用が認められることになり、現在に至っている。ここで強調したいのは、スラブ研の図書業務はこれらの人たちの協力によって辛うじて支えられているという実情である。

1980(昭和55)年の図書室のニュースは、フロリダ大学の故レンセン教授(George Lensen)の旧蔵書の購入であった。レンセン教授は1979年度の当センターの外国人客員研究員として来日が予定されていたが、1979年1月5日不慮の交通事故で急逝された。その蔵書がレンセン未亡人の好意によりスラブ研に受入れられたのは、くすしき因縁というべき

かもしれない。同教授の専門は、17世紀末より現代までの日露・日ソ関係であり、この分野の世界的権威であった。コレクションの特色は、日露・日ソ関係、ソ連の極東政策、ソ連の周辺地域の歴史・文化・外交関係に関するものが精選されたかたちでまとまっていることである。単行本（露文・欧文・和文からなり総数2,500点、3,200冊）のほかに、雑誌類、文献のマイクロコピー、多数の手稿資料が含まれている。その中には遺稿の *Balance of Intrigue* の膨大なタイプ原稿などがそのままのかたちで残されている(21)。

この年の5月にはハーヴァード大学ウクライナ研究所のグリムステッド女史（P. K. Grimsted）がセンターを訪れ、「ソ連の文書館 ── その現状と西側研究者の受入れ」と題して講演会が開かれた。

同年7月、駐日ルーマニア大使ボグダン氏（Radu Bogdan）が北大を表敬訪問され、スラブ研究センターにも立ち寄った。この時350冊余のルーマニアに関する図書が寄贈され、それらの展示会が7月24日～26日までの3日間附属図書館資料展示室で開かれた。1964（昭和39）年にも170冊余が寄贈されており、ルーマニア政府からの寄贈図書は、今回の寄贈図書を加えると500冊以上にのぼる。

この年の秋（1980年9月29日～10月4日）西ドイツのガルミッシュ＝パルテンキルヘンで第2回ソ連・東欧研究世界会議が開かれ、スラブ研からは木村汎教授と筆者が出席した。この会議の特色の1つに図書関係部会の併置があげられる。アメリカやヨーロッパでは研究と資料の蓄積、相互サービスは一体となって動いていることを体験させられた会議であった(22)。

同年10月にはスラブ研究センターの増築工事が始まり、翌1981年3月竣工した。当時の法学部の3階建ての上に2階を増築し、スラブ研究センターは1階と4・5階を使用し、1階は事務・図書フロアー、4階は会議室など、5階は研究室として使用されることになった。使用面積はいままでの517平米から3倍強の1,655平米になった。図書室についていえば、新築ではないのでいろいろの制約があり、全体の面積は増えたが、利用上は多くの問題が残された。参考室・雑誌室は独立し、これらの部屋は通常は施錠されているため、使用に際してそのつど利用者が鍵を開けることになり、利用上の管理は全くの野放しとなった。外国人研究員のなかには、鍵をポケットに入れたまま借用手続きもせずに雑誌や新聞をもってエレヴェータで研究室に直行する人もおり、面白い記事があると資料を他の人にたらい回しにして行方不明になることもあった。あちこち探しまわって最後に研究員の本棚や長椅子の上で発見されることもあり、新聞・雑誌室の鍵の探索も珍しいことではなかった。この問題が解決されたのは、14年後の1994年のことである。

この年の秋には、特別設備費が配分され、科学研究経費、経常費合わせて1980（昭和55）年度の図書購入費は4,490万円にのぼった。

スラブ研究センターは、外見上は建物も増築され、国内外の研究者の交流や研究活動も活発になったが、内情はそんなに豊かなものではなかった。この頃のスラブ研究センターの受入れ図書冊数は、臨時の予算措置により、少しづつは改善され増加しつつあったとはいえ、諸外国のスラブ研究機関のすぐれたコレクションとは比較にならなかった。

スラブ研ではこの現状を打開するために、1981年の概算要求に「基本図書整備5カ年計画」（昭和56年～60年）を申請することになった。この計画は、わが国のスラブ地域研究の

発展に必要不可欠な基本資料を短期間で重点的に整備することを目指したものである。アメリカにおけるスラブ地域研究の主導的な機関の1つであるイリノイ大学ロシア・東欧研究センター（1948年設立）をモデルとして、その5分の1の規模を目標に計画がたてられた。1980年当時イリノイ大学の蔵書数は約55万冊、スラブ研の蔵書数は46,000冊であった。特に図書の要求資料の作成は、はじめての試みでもあり、法学部会計掛経由の本部の指令は紆余曲折があって困難を極めた。要求金額1年間3,000万円、5年間総額1億5,000万円にのぼる内訳に個々のタイトルと冊数と金額を記入することが求められた。この気違いじみた作業は、スラブ研スタッフ全員の昼夜わかたずの努力とナウカ書店の協力もあって、一応形式を整えて完成した。手稲山の向こうに広がる初夏の真っ赤な夕日にそまった黄昏を見ながら、このむなしいような仕事に取り組んだ日々も今は懐しい思い出である。

1981(昭和56)年には、昨年の努力のかいあって「基本図書整備5カ年計画」(1981～1985)が承認され、実現の運びとなった。しかし要求額は全額ではなく、全体の約3分の2にあたる年間1,920万円、総額9,600万円であった。とはいえ図書費のやりくりに日夜明け暮れていた筆者にとって、この予算決定のニュースは筆舌につくしがたい喜びであった。同時に今まで長い間保留されていた高額の資料を計画的に発注することも可能になり、古書市場のカタログの丹念なチェックも始まった。図書委員外川継男教授の名前でスラブ研の運営委員、併任研究員に宛て、「一点10万円から100万円の範囲で購入希望資料の推薦」を依頼した。主として学内の研究員から多くの推薦があり、入手可能なものから順次購入することになった。

その後は「基本図書整備計画」によるこの予算が、スラブ研の図書購入費の大部分を占めることになる。1985年度の「第1次基本図書整備計画」の終了とともに、幸いなことに1986(昭和61)年には「基本図書整備5カ年計画」の追加として3年間の継続（1986～1988)が認められ、前回より少し減額されて年間1,560万円、総額4,680万円の図書購入費が1988(昭和63)年まで配分された。この図書整備計画の終了とともに、「第2次基本図書整備5ヵ年計画」(1989～1993)の申請がなされた。この計画では、年間1,442万円、総額7,210万円の資料購入費が承認された。このようにして13年間にわたる図書整備計画は、雑誌・新聞のバックナンバーをはじめ、歴史・文学・政治・経済・情報等の各分野の文献・資料の欠落部分を補い、スラブ研究センターの基本図書の充実に大きな役割を果した。

しかし、1989年末から始まった東欧地域の変革と、1991年12月のソ連邦の崩壊は、スラブ地域研究の基礎資料の絶対数に飛躍的増大をもたらし、モデルとなったイリノイ大学ロシア・東欧研究センターとの蔵書数の格差は、縮まるどころか拡大した。スラブ地域での大きな変動は、これまであまり重視されていなかった地域研究の必要性を増大させ、各地域、各民族の言語資料の重要性が高まったのである。さらに1990年6月には、センターが「学内共同利用施設」から「全国共同利用施設」へ機構改組されて、新しい研究体制と、それに基づく資料収集計画の見直しが必要になった。かくて「第3次基本図書整備計画」(1994～1998)案でも、年間3,000万円、5年間で総額1億5,000万円を要求したが、この度の予算措置は、要求額の4分の1強にとどまり、年間800万円、総額4,000万円の小規模なものであった。

1982(昭和57)年には、2回にわたってチェコスロヴァキア大使館から図書が寄贈され

た。第1回は同年1月（53冊）、第2回は同年5月（パンフレット含む欧文44冊、和文6冊）で、主として英語で書かれたチェコスロヴァキアの歴史、経済、国家体制、文化、言語、教育に関するものであった。チェコスロヴァキア社会主義共和国の新しいプロフィールの紹介を目的としたものである。

同年6月伊東センター長により「ソ連・東欧研究所構想」が打ち出された。これはスラブ研の長期にわたる将来構想である。

同年附属図書館に、ソ連の対外関係に関する故エプシュタイン教授（Fritz T. Epstein）の旧蔵書（Fritz T. Epstein Collection on the Foreign Relations of the Soviet Union）が受入れられた。これは当センターの購入希望で、昭和57年度全国共同利用外国図書購入費により購入されたものである。

1983(昭和58)年には、故清水威久氏（1904～1981）の旧蔵書の一部が、日ソ図書の斎藤右司氏の紹介により、御遺族清水禎一氏と古閑雪氏の好意でセンターに寄贈された[23]。同氏はソ連の対日関係の専門家であるが、外務省在職中ポーランドで収集したポーランド関係図書81点125冊を含むものである。この中にはポーランド『官報』(*Dziennik Ustaw*, 1944-1962) が製本されて収められている。同氏のソ連関係の多くの図書は「清水文庫」として外務省に寄贈されている。

この年の春に長い間嘱望されていた英文紀要 *Acta Slavica Iaponica* の第1号が刊行された。この号には、筆者のわが国におけるスラブ関係資料の現状を紹介した "Major Russian/Slavic Collections in Japan" が掲載された[24]。同年9月米国カリフォルニア大学（バークレー）図書館のカシネッツ氏（Edward Kasinec）（現在ニューヨーク市立図書館スラブ部門部長）を招き、「西側のスラブ関係蔵書 ―― 一書誌学者の見解」と題して講演会が開かれた。

1984(昭和59)年の図書関係の大きな出来事の一つにベルンシュタイン・コレクションの購入[23]があった。これはロシア亡命ジャーナリスト、ベルンシュタイン（Leon B. Bernstein）が60年の歳月をかけて収集したロシア革命運動に関する膨大なコレクション（数量は5,000点をこえている）である。そこには主要な革命組織の基本文献から原史料にちかいもの、さらにいままであまり研究されていなかった小さな革命組織の資料なども揃っており、モスクワのマルクス・レーニン主義研究所、アメリカのフーヴァー研究所、アムステルダムの社会運動史研究所にもない資料も含まれている。ベルンシュタインが、ナチ占領下のパリにいたということもあってパリへ亡命した社会主義者や組織の蔵書・資料類、パーヴェル・アクセリロードの蔵書、ボリス・クリチェフスキーの蔵書、グリゴリー・アレクシンスキーの蔵書、及びブンド、ロシア社会民主党外国本部、エスエル党のアルヒーフなどの一部も含まれている。特筆すべきことは、ロシア革命に関する資料のみでなく、ソ連の歴史と文化に関する基本的なもの、歴史の古典、フランス語で書かれたソ連論、その他いろいろの革命組織の機関紙やパンフレット類なども集められていることである。

このコレクションについては、コロンビア大学のベシェンコフスキー教授（Eugen Beshenkovsky）によってカタログが作成されており、それには同氏の詳細な紹介文が付け加えられている。コレクションは最初にベルンシュタインがシカゴのニューベリー図書館に売却し、さらにニューヨークのハンターカレッジに移され、限られた関係者以外には知ら

れていなかったものである。このようにすぐれたコレクションが文部省の「全国共同利用図書購入費」で北大の附属図書館に受入れられたことは、画期的なことであった。

コレクションの購入に際しは、センターでも研究員が一致してそれなりの努力をしたことを記しておきたいと思う。この年の4月半ば、例年の文部省の「大型コレクション購入」の申請の時期にあたって、ナウカ書店がもたらした情報の中に「ベルンシュタイン・コレクション」があった。カタログの序文を読んで、筆者は是非とも購入申請をしたいと思い、図書委員の木村教授に相談した。文部省の「大型コレクション」の購入手続きは難しい。第一の問題点は、年度内に申請した現物が納入されるかどうかということである。申請の段階では予算がつくかどうか未定であるが、最初から国内の業者がなんらかの形で前もってコレクションを確保する手段を講じる必要がある。これは大きな賭である。しかし予算がついた時に現物がないということは許されない。古書市場は流動的で、早いものがちの世界である。したがってこの高額なコレクションの購入に手を貸してくれる書店を探して事前交渉をする必要があった。木村教授を中心に関係研究員を囲んで相談し、外国の古書購入の取り扱いに慣れている在京の書店を招いて対応の方法を話し合った。この度スラブ研の勝手な希望を受入れてくれる書店に出会ったことは幸いであった。他方ニューヨークに滞在していた長谷川研究員にコレクションの内容の真偽を確かめる調査を依頼したところ、非常にすぐれたコレクションで、状態もよいとの情報がとどき、一同ホッとしたことを憶えている。高額なコレクション購入にあたっては、購入を希望する側の熱意は勿論のこと、それを取り扱う書店や関係当局などの理解と協力が不可欠であることをしみじみ感じさせられた次第である。

この年の図書室のもう一つのニュースは、前年秋（1983）の附属図書館の増築工事完成に伴い、スラブ研の蔵書が附属図書館書庫3層から、増築部分の西書庫2層に移転したことである。この部分は通路を含めて348平米あり、約62,000冊の図書の収納が可能となった。しかしこのスペースが増加する受入れ図書によって一杯になるのもそう遠い日のことではなかった。

1985(昭和60)年からその年度に新しく購入が決定した雑誌・新聞を、『センターニュース』の「図書室だより」欄で、＜新顔の購入雑誌＞と題して紹介することになり、『センターニュース』22号（1985年、7月）が初登場となった。

同年関西の実業家鈴川正久氏の好意により、2,000万円が寄付され、「鈴川研究奨励基金」が設置された。この基金によって、その後毎年国内のすぐれた若い研究者がスラブ研に招かれ、短期間研究に従事することになった。第1回の研究生の応募は1987年である。

第3回ソ連・東欧研究世界会議が、10月30日から11月4日までワシントンで開かれた。スラブ研からは木村、伊東、長谷川、望月、松田、兼任の木戸、和田の各氏及び、筆者の8名が参加した。図書関係部会では、松田氏と筆者の2人がそれぞれ「わが国におけるスラブ・東欧研究の書誌計量分析」及び「1980年以降のスラブ研究センターの図書室」と題して報告をおこなった(25)。その後ヴァージニア大学で「国際図書交換会議」が開かれ、ここではヨーロッパ・アメリカ・カナダなどの代表的な図書館から集まった34人のライブラリアンによって、それぞれ自館の国際図書交換の現状と問題点について短い報告がなされた。筆者もスラブ研究センターの貧しい現状を報告することになった(26)。2つの国際会議

が終わって、筆者はアメリカ国務省の招待で約3週間、すぐれたスラブ関係コレクションを所蔵する図書館めぐりの旅をした。この旅行は生涯においてもっとも印象的なものとなった(27)。

1986(昭和61)年5月には大塚恵理助手が情報資料部に新しく採用され、図書業務を分担することになった。彼女はアメリカのイリノイ大学大学院修士課程修了で、これからの活躍が期待された。

この年は附属図書館で図書業務の電算化が始まり、今後全ての図書情報はコンピュータに入力され、文部省の学術情報センターの管理下におかれることになった。従来のローカルな自館の図書カード様式は廃止され、図書情報の入力も検索もすべてコンピュータによることになった。この1年はコンピュータの講習にあけくれた。翌年には現代ロシア語字母の直接入力システムが、附属図書館学術情報課の山田課長の努力によって、わが国で初めて開発された(28)。

図書業務の電算化により、図書館の利用の仕方も少し変わった。北大の図書館を利用するすべての教職員に図書利用票が発行され、図書利用票のID番号により、書庫内にある図書のうち、書誌データがコンピュータに入力され、本にOCRラベルの貼ってあるものは、ハンド・スキャナーでなぞるだけで借用手続きが完了することになった。

1987(昭和62)年4月には、田畑研究員によって1940年以降の年次データを収録したソ連経済統計データベース（SESS）が公開され、全国国立大学ネットワークに提供された。

わが国におけるスラブ研究の立ち遅れをとりもどすために、「スラブ研究の推進方法検討会」(文部省科学研究費総合B）が、1987年7月18日（札幌)、ついで同年10月21日（東京)、翌年1月29日（札幌）の3回にわたって開かれた。1回目の検討会で、資料情報体制については、田畑研究員、松田氏、筆者がそれぞれ報告した。第2回の東京検討会は、長谷川研究員のディスカッション・ペーパーに基づいて、わが国におけるスラブ研究の抱える問題とその解決策について討議された。ここでは2つのアピールが採択された(29)。その一つは「スラブ地域雑誌センター設立に関する要望書」であった。これはスラブ地域の人文・社会系の定期刊行物の系統的な収集と利用サービスを目的とするものであった。当時すでに社会科学系雑誌センターが一橋大学に、人文科学系雑誌センターが神戸大学に設置されていたが、スラブ諸国の定期刊行物については多くの問題が残されていた。これらの問題点を是正するためにイスラム地域、スラブ地域といった文化的にまとまりのある地域ごとにサブセンターを設けるべきであることが提唱されたわけだが、残念ながらこの提言は文部省の認めるところとはならなかった。

しかしもう一つの「日ソ文化交流協定に基づく国費交換留学生制度に関する要望書」のほうは認められて、交換制度は有効に機能し、ソ連邦崩壊の1991年まで続いた。

この年の夏には初めての鈴川基金奨励研究員8人を迎えた。受入れ側の図書室にも不十分なことが多々あったが、全国から若い研究員を迎えて多忙ながら熱気あふれる夏であった。鈴川研究員はスラブ研を去るに際して、この制度による研究成果・意見・要望・感想などを落書帳に記すことになっているが、「センターへの要望」の中には率直な意見が相次ぎ、「帝政末期の研究に必要な資料の欠如」などの厳しい意見もだされた。これらの指摘は筆者にあらためてコレクション全体の不備を見直す機会を与えてくれた。落書帳の記入は、

第1回（1987）鈴川奨励研究員から1994年の夏まで継続されており、さまざまな意見から研究員気質の変遷も瞥見できて興味ぶかい。鈴川基金で来札した研究員のことで嬉しいことが二つある。一つは再びスラブ研を訪れてくれること、もう一つは業績としての著書や論文発表のニュースを聞くことである。第1・2回生達はもうすでに社会的に活躍し、多くの業績をあげているが、それらが図書室に寄贈された時の喜びは大きい。寄贈された著書を見る度に、共に過ごした暑かった夏、肌寒かった夏、山のようなコピーの話などがいろいろ懐かしく思い出される。

1988(昭和63)年3月、『外国雑誌目録（1953－1988)』(スラブ研究センター所蔵）が刊行された。欧文雑誌319点、露文雑誌337点、計656点を含むA4版71ページの小冊子である。附属図書館が初めてコンピュータによって編集した『北海道大学雑誌総合目録（外国雑誌編)』(昭和63年版）の書誌データの中から、スラブ研究センター所蔵の書誌データのみを打ち出し、それらを補足、訂正して作成したものである。3月末には、1987(昭和62)年度の全国共同利用外国図書購入費で、ゲルシンスキ文庫（the Henryk Gierszynski Collection)およそ2,500点が附属図書館に受入れられた。これは1830～1918年のポーランドの独立運動、社会主義運動についての原資料で、ポーランド近・現代史研究にとって必須の資料である。

ロシア科学アカデミー図書館（BAN）が1988年2月15日に火災にあったというニュースが、3月27日付けの『モスクワ・ニュース』に掲載された。この図書館は、1714年ピョートル1世がモスクワやバルト沿岸地方から図書資料をあつめて作った文庫が、1724年ペテルブルグの科学アカデミー設立とともにその附属の図書館となったもので、約280年の歴史を有している。今回の火災で貴重な資料が甚大な被害を蒙ったことは、大変残念で惜しまれることであった(30)。

この年の3月に、仕事にもスラブ研にも慣れた大塚恵理助手が、残念ながら2年間で退職することになり、同年4月その後任に津田塾大学学芸学部国際関係学科卒業の小竹史緒助手が採用された。彼女は結婚のために翌3月末退職した。後任は同大学出身者の杉浦和子助手であったが、彼女も僅か1年で一身上の都合のため1990年3月退職することになった。

3．全国共同利用センターの時代（1990年以後）

1990(平成2)年6月、12年間続いた「学内共同教育研究施設スラブ研究センター」は「全国共同利用施設スラブ研究センター」に改組された。この改組により、教授定員2名、助手定員1名、客員研究員2名の増員が認められた。この度の定員増は情報資料部の充実にもつながり、情報資料部は講師1、助手2の3名構成となり、新しく野原美香助手を迎えて出版・広報活動は完全に独立することになった。一方図書室は純粋に図書業務に従事する事務官定員1名（佐々木光子）と教官定員1名（筆者）との2名で運営されることになった。この大きな変化はスラブ研創立の1953年から数えて38年目のことである。筆者はこの時事務官から情報資料部の教官ポストに移行し、引き続き図書業務全体の管理を担当することになった。

1990年の改組は予算上も大きな変化をもたらした。図書の受入れ冊数も飛躍的に増大した。この年度の受入れ数は3,941冊（洋書3,711冊、和書230冊）、マイクロフィルム309タイトル、1,480リール、マイクロフィッシュ112タイトル、2,690シートである。

同年7月英国のハローゲイトで第4回ソ連・東欧研究世界会議が開かれた。この度はわが国の研究者も多数参加した。この会議に先だってケンブリッジ大学で第3回国際スラヴィック・ライブラリアン会議（ISLC）（1990年7月18日～7月21日）が開かれた。筆者も後者の会議に出席するとともに、終了後ハローゲイトの会議に合流した(31)。

1991（平成3）年の図書室のニュースは、216タイトルの新聞・雑誌を新規に発注したことである(32)。内訳は次の通りである。アルバニア5点、ブルガリア7点、チェコスロヴァキア14点、ハンガリー18点、ポーランド12点、ルーマニア22点、ソ連邦97点、ユーゴスラヴィア20点、ビザンチン関係3点、その他18点。すでに述べたように、1987年に提言された「スラブ地域雑誌センター設立」の夢はすでに潰えたが、今回の膨大な発注の背後にあるものは、わが国におけるこの分野の現状を少しでも改善すべく、スラブ地域の雑誌センターの核になることを目指した計画である。タイトル選択に際しては、一応各専門家の意見を聞くなどこの段階で必要なことはしていたが、相次ぐ東欧の変革、ソ連邦の崩壊などにより、大きな見直しが求められている。特に1991年12月のソ連邦の崩壊は、ロシア革命以来継続してきた多くの新聞雑誌の名称変更を余儀なくした。さらにこの機会に廃刊となったものも数多い(33)。

ベオグラード文学・芸術研究所のペトロフ研究員（Aleksandar Petrov、1990年外国人研究員）の推薦で発注したユーゴスラヴィア関係の図書が、一年をへた1991（平成3）年の春に多数入荷した。それらは19世紀中葉以降のユーゴスラヴィア地域の逐次刊行物31点と単行本のセットもの4点で、総冊数594冊にのぼる。これらの中には*Brastvo*（Beograd, 1887-1941）や、*Ljubljanski zbon*（Ljubljana, 1881-1941）のように19世紀後半から20世紀前半にかけて出版された主要な雑誌が、完全なかたちで含まれている。国内ではみることの出来ない貴重なコレクションである(34)。

さらに米国国立文書館の国務省文書のマイクロフィルムを購入したのもこの年のことであった。これはロシア・ソ連邦関係公文書（692リール）と東ヨーロッパ関係文書（740リール）に大別され、さらに関連資料（オーストリア・ハンガリーとオーストリアの国内事情・対外関係1910－1929年、76リール）を含む総数1,508リールの膨大な資料集である。

11月に畑山擁夫氏（1947年北大医学部卒業、医師）からチェコ語の図書36冊が寄贈された。畑山氏は国際会議に出席のためプラハに行き、チェコが大変気に入り、チェコ語の勉強を始められたとのことである(35)。

ロシア革命からソ連邦の崩壊までの長い間、深いヴェールに包まれていたソ連邦共産党の文書が、マイクロフィルム化されて販売されるというニュースが世界中に流れたのは、1992（平成4）年1月のことであった。共同通信社の提供でわが国の新聞各紙にも掲載され、5月には『モスクワ・ニュース』にも取り上げられた。『モスクワ・ニュース』のレポートは、共産党文書の売却をめぐってロシア内にも異論のあることを伝えた興味深い記事である(36)。文書の公開をめぐるいろいろの議論とは関係なく、この膨大な文書はマイクロ版としてすでに刊行が開始された。目録（The Opisi series）と文書本体（The Dela series）

に大別され、全部でおよそ5,000リールに及び、全部まとめて購入すれば総額7,000万円前後になる見込み(数量を多く買うことにより安くなる仕組み)である。しかしこれらリール数と金額についての情報はまだ流動的である。いずれにせよ膨大な金額に対する予算措置は頭の痛い問題である。

1992(平成4)年4月には図書室の佐々木光子事務官が教養部図書館に転出し、桜洋子事務官が転入して今日に至っている。

同年7月、文献社をとおしてドイツのクーボン・ザグナーから *Комсомольская правда* (1948-1993)、*Политика*(1926-1993)、*Рабочая газета*(1963-1990)、*Népszabadság*(1953-1990)、*Scînteia (Adevarul)* (1954-1989)、*Życie Warszawy* (1952-1990) の6タイトル1,012冊にのぼる新聞のバックナンバーをオリジナルで購入した。これらのうち *Рабочая газета* と *Scînteia* をのぞく4タイトルは、現在購入中のバックナンバーの欠号部分を埋めるものである。新聞のバックナンバーとしては比較的欠号が少なく、状態のよいのもこのコレクションの特色である。

1992年度末から1993年度にかけて、英国外務省が所蔵していたロシア関係図書の一部を購入した。このコレクションは英語を主とした欧文図書とロシア語図書からなっている。前者は230冊で、英国外務省がロシアの歴史・文化を知るために集めたと思われる精選されたものである。後者のロシア語図書は4,500タイトルのタイトル・ページのコピーの中から、ジュークス研究員 (Geoffrey Jukes、1992年度外国人研究員) に選択を依頼し、重要性の度合いによりA．B．C．D．に分類して、その中から761冊を受入れた。これらは主としてロシアの外交・極東政策に関するものである。

アルバータ大学のモジェイコ教授 (Edward Mozejko、1991年度外国人研究員) による東欧の主要文学者340選リストが作成されたのは、1991年秋から翌年の冬にかけてのことであったが[37]、はからずも1993年1月末にはチェコ文学コレクション883点を購入する機会を得た。望外の喜びであった。今世紀前半の詩作品を中心としたもので、チェコ文学史上重要な作家の作品をある程度系統的に集めたものである。このコレクションについては北大言語文化部の橋本聡助教授が、「詩による20世紀チェコ文化の解読(新着図書紹介)」と題して、丁寧な紹介文を書かれている[38]。

1993(平成5)年3月、ニュージャージー州立大学のズナイエンコ教授 (Myroslava Tomorug Znayenko、1992年度外国人研究員ルドン教授夫人)からウクライナ関係図書9冊が寄贈された。それらはウクライナの文学者V.ヴィニチェンコ (Volodymyr Vynnychenko) の作品と彼をめぐる評論など5冊、ウクライナ文学に関するもの2冊とウクライナ史研究資料2冊である。

同年10月には、ウクライナのキエフでウクライナ科学アカデミー図書館創立75周年記念国際会議が開かれた。筆者もそこへ招かれ、ウクライナ科学アカデミー図書館を見る機会を与えられた[39]。11月にはハワイで環太平洋地域(ロシア極東を含む)のスラヴィック・ライブラリアンの会議が開かれ、引き続き第25回AAASS年次総会が行なわれた。ここで出会ったロシア極東地域のライブラリアン達との交流によって新しい国際図書交換のきっかけが生まれた[40]。

同年12月には『北大におけるロシア関係資料 ── 個人コレクションとロシア語マイクロ

資料』が英文で出版された。これは北大における貴重なスラブ関係個人コレクションについての紹介と、マイクロフィルム・フィッシュのかたちで所蔵されているロシア語の新聞・雑誌の目録を含むものである(41)。

1994(平成6)年の年度末も迫った3月、待ち望まれていたスタンフォード大学フーヴァー研究所所蔵のB.I.ニコラエフスキー・コレクションのマイクロ版を購入した。このコレクションはボリス・ニコラエフスキーによって収集された世界的に有名なロシア革命史研究文書集である。全体は11ユニットに分れているが、1993年度にはユニット1～7の250リールのみが受入れられた(42)。春には安藤厚、浦井康男、望月哲男の諸氏がコンピュータで編集した『ドストエフスキー『罪と罰』コンコーダンス』が刊行された(43)。『罪と罰』のロシア語テキストの語彙索引で、世界でも例をみないものとして高く評価されている。

原教授の提案で『スラブ研究センターニュース』に寄贈受入れ図書リストを掲載することになり、57号（April 1994）から掲載を始めることになった。

この年の受入れ資料のうち特筆すべきものに、旧ソ連邦20万分の1の地勢図の購入がある。これはソ連閣僚会議測地・地図製作本部発行のもので、従来は軍事目的及び政府のための利用に限定されて門外不出であったが、最近になって漸く公開されたものである。この地図は、日本の国土地理院の地形図と同様、経度6度幅ごとに中央経線を設定するユニバーサル横メルカトル（UTM）図法で描かれている。1956年から1991年までに測量・調査された旧ソ連全土の陸地部分が網羅されている。総枚数4,472枚といわれているが、さらに国境線・海岸線に含まれている部分19枚が追加されている。1枚の地図紙面のサイズは、縦46 cm、横50 cm、地図そのもののサイズは縦38 cm、横47 cmの6色刷りの地勢図である。センターにおける地図の整備は非常に遅れており、1993年度の概算要求による民族環境部門の増設で、整備の必要が高まっていたので、20万分の1の旧ソ連邦全図のはじめての発売の機会にめぐりあえて幸いであった。

1995(平成7)年度から重点領域研究「スラブ・ユーラシアの変動」が始まることになり、すでに予備調査のための科学研究費総合研究Bの交付が決定し準備は着々と進んでいる。このプロジェクトはスラブ研内外の研究員が多数参加する大規模なもので、3年継続の予定であるが、図書室にもよい影響をもたらすに違いないと信じている。

最後にこの40年間を振り返ってみると、スラブ研究センターにおける機構の変革、研究機能の充実、予算の増加、図書資料の整備、建物の拡張などのめざましい発展の陰にかくれて、あまり変化しなかったものは事務機構である。創立以来の事務定員2名が正式に3名になったのは1990年6月のことである。センターの予算の大半は研究のための図書費に支出され、定期刊行物の受入れ、受入れ図書のコンピュータ入力、国内外の研究者や研究機関から寄せられる文献その他の情報についての照会、国際交換業務も日常的であるが、予算や受入れ図書の飛躍的増加のほかに輻輳する事務量の増大にも拘らず、図書の事務定員は僅か1名である。

4．蔵書の特徴

スラブ研の資料収集活動は、1953(昭和28)年の設立とともに始まった。旧ソ連の出版物

がナウカ書店を通じて輸入されはじめたのも1952年以降のことである。40年後の1994年5月1日現在の蔵書数は、単行本74,819冊(洋書69,913冊、和書4,906冊)、マイクロフィルム16,514タイトル、6,216リール、マイクロフィシュ5,452タイトル、110,826シートである。

これらの数字は、長い歴史を持つ欧米のスラブ研究機関の図書館の蔵書数とは比較にならないが、スラブ研のコレクションの特色は基本的な文献が精選されていることである。収集の対象は、人文・社会科学に限られているが、旧ソ連を中心として広く東欧諸国の歴史・文学・政治・経済・国際関係等の分野に及んでいる。特にその特色は定期刊行物と参考図書に反映されている。1979(昭和54)年秋、外国人研究員としてスラブ研に招いた元アメリカ議会図書館・スラブ部門部長ホレツキー博士(Paul L. Horecky)から、「規模は小さいが、精選されたバランスのとれたよいコレクションである」とのおほめの言葉を頂いた。しかしながらスラブ研の創立年が示すように、そのコレクションの大部分は1953年以降の出版物で占められている。その過半数はロシア語文献であるが、第2次大戦以前のものは少なく、ロシア革命以前のオリジナルの出版物は非常に限られている。しかし最近では個人コレクションの購入やマイクロ資料の充実により、この欠陥も急速に補われ始めている。

スラブ研の蔵書は、上記の蔵書数が示すように、図書とマイクロフィルム、フィシュの2種類から構成されており、マイクロ資料の割合が非常に高いことも特徴の一つである。第2次大戦以前の出版物をオリジナルで購入することは難しいが、最近はアメリカ及び西側の書店から送られてくるマイクロ資料の情報が豊富で、それらを受入れることにより古い文献の補充がなされている。

1953年にスラブ研が受入れた最初のマイクロフィルムは *Историк-марксист* (vols. 1-52, 56-94)、*Исторический журнал* (vols. 1-6)、*Красный архив* (vols. 1-106) などであった。それ以後受入れたマイクロ資料のうち、主なコレクションには次のようなものがある。

『18世紀ロシア出版物集成』(18th Century Russian Publications/Сводный каталог русской книги гражданской печати XVIII века 1725-1800. 1978-1990, 1994- . Microfilm. 4,730 titles, 819 reels)(しばらくの間刊行が中断されていたが、1994年12月から再開されることになった)。

『日本関係書誌』(Библиография Японии, 1734-1917, 1917-1958. 1978. Microfilm. 14,149 titles, 726 reels)

『ソヴェト伝記資料集成』(The Soviet Biographic Archive, 1954-1985. 1986. Microfiche. 2,812 sheets)

『ロシアの歴史と文化』(Russian History and Culture. 1978-1988, 1989- . Microfiche. 2,146 titles, approx. 8,000 sheets)(現在受入れ継続中)

『ロシア革命文献集』(ハーバード大学・ホートン図書館所蔵)(Russian Revolutionary Literature. 1978. Microfilm. 1,168 titles, 47 reels)

『ロシア革命パンフレット集成』(LSE附属英国政治・経済学図書館所蔵)(Russian Revolutionary Pamphlets, 1860-1923. Microfiche. 243 titles, 329 sheets)

『シベリア出版物資料集 1917～1924』(Siberian Press Materials. Microfiche. 121

titles, 335 sheets)

『ロシアの政党に関する出版物』(Russian Political Parties in the Late 19th and Early 20th Century. Microfiche. 240 titles, 596 sheets)

『ゼムストヴォ（地方自治会）統計資料集成』(Zemstvo Publications. Collection of the Statistical Publications of the Zemstvo, 1870-1917. 1970-1991. Microfiche. 151 titles, 8,312 sheets)

『国勢調査資料』(Census Survey Material)

第1回（1897）ロシア帝国国勢調査 (Первая Всеобщая перепись населения Российской империи, 1897 г. Том 1-89, 1899-1905. Microfiche. 855 sheets)

1926年全ソ連邦国勢調査及びその目録 (Всесоюзная перепись населения 1926 года. Том 1-56. 1928-1935. Microfilm. 29 reels. Краткие сводки. Вып. 1-10, 1927-1929. 2 reels)

『ロシア革命期新聞集成』(Newspapers from the Russian Revolutionary Era. Microfilm. 51 titles, 458 reels)

『ボリス・ニコラエフスキー・コレクション』(The Boris Nicolaevsky Collection in the Archives of the Hoover Institution on War, Revolution, and Peace.〈受入れ分〉224 series, 290 boxes, 250 reels)

帝政ロシア・臨時政府・ソ連・ソヴェト共和国の議会・行政府議事録等

ロシア国家評議会議事録（第1会期～第13会期、1906-1917. Microfilm, 9 reels）や、ロシア閣僚会議臨時議事要録（1906-1917. Microfilm, 30 reels）など貴重な資料が含まれている。

定期刊行物

定期刊行物収集の特色の一つは、種類数は多くはないが、タイトルが精選されていることである。

1994年5月1日現在の定期刊行物の受入れタイトル数は和雑誌33点(購入9点、寄贈24点)、洋雑誌380点（購入308点、寄贈72点)、外国の新聞93点（購入85点、寄贈8点）である。

19世紀中葉から革命までに出版されたロシアの主要な定期刊行物 *Вестник Европы*、*Русская мысль*、*Русская старина*、*Русский архив*、*Русское богатство*、*Чтения в Императорском обществе истории и древностей российских* などはほとんどオリジナルで揃っている。そのほか、ユーゴスラヴィアの19世紀中葉から20世紀前半の雑誌もかなり揃っている

1990年全国共同利用センターへの改組を機会に、スラブ研図書室では収書方針の一つの柱として新聞を含む定期刊行物の組織的な収集を掲げた。1991年には、前記のように216タイトルの定期刊行物が新規に発注されたが、それらについてはいろいろの問題も含まれている。しかし従来の欠落部分を補う意味でのバックナンバーの購入計画はマイクロ形態で着実に進行している。西側では完全な形で入手困難だった新聞類も、マイクロフィルムやフィッシュで入手することも可能となった。しかし当然のことながらそれらのタイトル

は限られている。出版される定期刊行物の新タイトル数は着実に増加するが、予算はそれに応じて増えるわけではないので、明確な基本方針と未来像が求められることになる。さらに定期刊行物は購入受入れ後にも、製本またはマイクロ化などの将来にわたる利用の問題、それに伴う予算とスペースの問題などが提起されている。このことは単にスラブ研のみならず、すべての図書館に共通する課題でもある。

参考図書

1994年6月、図書室の全面改造とともに参考室は広いスペースとなり、今まで1つの部屋に集中していた資料はロシア関係資料、東欧関係資料および語学辞書の3つにわけて、それぞれ独立した。総冊数は約4,500冊で、ロシア関係のものが全体の半分を占めている。東欧については、チェコスロヴァキア、ポーランド、ルーマニア、ユーゴスラヴィアなどそれぞれ国毎に分れている。

参考室には旧ソ連邦・東欧諸国・バルカン諸国の百科事典及び各国語辞典、主題辞典、各国書誌、主題書誌等が比較的よく揃っていることも蔵書の特色の一つである。ロシアの百科事典では、『ブロックハウス・エフロン百科』、『ブロックハウス新百科』、『グラナート大百科』、『ソビエト大百科』(初版から第3版まで)、その他数セットの小百科、各共和国の百科事典がある。言語辞典は豊富で、創立期から集められており、ロシア語は勿論、教会スラブ語、諸共和国、自治共和国の言語辞典も揃っている。

歴史の浅いスラブ研の書架で異彩をはなっているものとしてチェコスロヴァキアのオットー大百科（*Ottův slovník naučný*, tom 1-28 & *Dodatky*, tom 1-6. Praha, 1888-1909, 1930-1943）がある。ポーランド図説大百科辞典（*Wielka ilustrowana encycklopedia powszechna*, tom 1-22. Kraków, 1923-38)、古ポーランド語辞典、文化・歴史に関する書誌類、ポーランド人名辞典（*Polski słownik biograficzny*, tom 1-31. Wrocław &c., 1935-1989. 現在刊行中）などポーランドに関するものは比較的揃っているが、これは伊東孝之研究員の協力に負うところが多い。

ここ数年のソ連邦の解体、それにともなう諸共和国の独立、ユーゴスラヴィアの分裂、チェコとスロヴァキアの独立などに伴う各国毎の参考図書の整備は、今後の大きな課題である。

スラブ研の図書室は、これまで地味な努力と周囲の協力によって発展してきたが、コンピュータ時代を迎え、図書の利用・検索・保存の方法なども次第に変わりつつあり、筆者はその未来を予測することは出来ない。北大でも従来の図書カードの作成が中止され、コンピュータに書誌データが入力され、検索されるようになって間もなく10年を迎えようとしている。今後は文献目録や百科辞典もCD ROMで刊行され、コンピュータによる検索が普通のことになるかもしれない。そして文献情報の入手は世界中を結んだコンピュータ・ネットワークによって一層容易になると思われる。とはいえスラブ研の図書コレクションの価値はそのことによって減じるものではなく、ますます高まるのではないだろうか。

終わりに、この小文を書くに際してご協力いただいた鳥山先生はじめ、多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

— 注 —

＊ 「スラヴ研究室」、「スラヴ研究所」、「スラブ研究施設」「スラブ研究センター」等に用いられている「スラブ」の表記には、上記のように〈スラヴ〉と〈スラブ〉の二通りがある。現在活字で残されている〈スラヴ〉の表記は、木村彰一教授の文部省科学研究費機関研究報告の中の〈北海道大学スラヴ研究所〉、紀要『スラヴ研究』、設立当時作成されたと思われるゴム印2点〈スラヴ研究所〉及び図書の基礎カードに印刷された〈スラヴ研究室〉の4点である。このゴム印は設立当初に受入れた図書にはすべて押されている。『北海道大学一覧』昭和28～31年版、32年版にはすべて〈スラブ〉と記されている。手もとにある資料から、両者二通りの使用を、現実に即して正確に使い分けることは難しいので、ここでは引用の記述はそのままにし、その他はわかる範囲でのみ区別し、のこりのものは全て「スラブ」に統一した。

1 「法学部附属スラヴ研究所」から「法学部附属スラヴ研究室」になった時期はさだかではない。調べてみたがそのころの記録は筆者のまわりには残されていない。『北海道大学創基八十年史』によると、スラブ研については、290頁に簡単な紹介と、沿革年表に「1953年6月24日スラブ研究室規定を制定する」と「1955年7月1日スラブ研究室は、法学部附属スラブ研究所となる」の2項目が記されているだけである。このことについて鳥山先生（スラヴ研究室創立以来スラブ研の研究員であり、スラブ研究施設長を歴任）に伺ったところ、先生の人事記録の写しをみせて下さった。それには「昭和31年2月1日北海道大学法学部附属スラブ研究室主任事務取扱いを命ずる（発令者＝文部省）。同2月1日スラブ研究室規定の1部改正により研究所員は、研究室研究員となる。（発令欄は空白）」と記されている。『研究所総覧』によると「昭和28年6月24日学内措置によりスラブ研究室を設置。昭和30年7月1日国立学校設置法施行規則の1部改正により、法学部附属スラブ研究施設を設置。昭和53年4月1日国立学校設置法施行規則の1部改正により、スラブ研究センターに転換」と記されている。この記述と鳥山先生の人事記録の写しとはずれがあるように思われる。筆者は、昭和31年2月1日に2度目の〈研究室〉となった日付は鳥山人事記録の写しが正しいのではないかと思う。名称の変遷について、ながながと書いたが、最終的に官制化されたものとしては、1955(昭和30)年「法学部附属スラブ研究施設」が設置されたことになっている。しかしこれは後に整理された命名であり、歴史的には「研究所」(1953－955) の名称も「研究室」(1955－1962)の名称も存在していたことを付記するにとどめたい。スラブ研の名称の変遷及び20年の歴史については、外川継男教授の「スラブ研究施設二十年の歩み」『スラヴ研究』No. 20（20周年記念号）、1975年、197-210頁参照。

2 『北海道大学創基八十年史』札幌、北海道大学、1965年、290頁。
外川教授（現上智大学教授）のメモによると5,000ドルと記されている。当時1ドル360円とすれば約180万円となる。500万円をドルに直すと約1万400ドルに相当する。更に『北海道大学一覧』昭和41年版（120頁）に「本施設は、その設立に当たって、米国ロックフェラー財団から、約五百点の図書の寄贈を受け、また、昭和三十五・

六年の二回にわたって関係学術誌および資料集のマイクロフィルムの贈与をうけている」と記されている。

3　鳥山教授談。後日米国訪問の際にヤコブソン氏に会い、礼を述べたとのこと。
スラブ研にはその当時議会図書館から送付されたマイクロフィルムの送り状が残っている。現在スラブ研にある古い雑誌 *Историк-марксист*, 1-52, 56-94 (23 vols.) など5点を含むものであるが、フィルムの単価、コマ数、リール代、外箱代、送料、総金額などすべての明細が記述されている。

4　スラブ研に送られたものとほぼ同じものが日本の国会図書館にも寄贈されたとのことである。鳥山先生談。

5　[昭和28～29年度] 文部省科学研究費機関研究報告、[昭和28－29年度] 5-11頁。ついで翌1955(昭和30)年には科学研究費による総合研究「ロシア人民主義の研究」が発足した。

6　鳥山教授からの聞き書きによる。

7　『北海道大学一覧』昭和41年版、120頁。
『北大時報』第75号、1960(昭和35)年6月30日、2頁にチェコスロバキア大使ドブロミール・イェチニー氏来学と記されている。Dr. Dobromir Ječný の大使の在任期間は昭和35年3月28日～39年5月15日であった。

8　当時の職員の在任期間は次の通りである。事務官芳賀柳二（1954年6月～1966年7月)、豊田久馬彦（1956年4月～1963年3月)、大垣徇（1963年4月～1971年3月)、成田京子（1963年4月～1967年3月)、助手更科道子（1956年4月～1961年3月)、助手出かず子（1964年8月～1985年5月、のち教授となる)。

9　拙稿「図書室だより」『スラヴ研究』No. 21、1976年、235-237頁。

10　図書定員9名のうち閲覧関係の3名は1年前の1973年に移行していたようである。

11　その要旨は、4項目からなる「人文・社会系所属図書館書庫内の図書」についてと、法学部図書室の図書館への統合の要望であった(「(イ)早急に、法学部図書業務を附属図書館業務に統合（集中化）することで協議する。(ロ)上記(イ)の業務統合（集中化）と同時に、図書掛職員全員を附属図書館に配置換する」)。さらに1975年3月の「法学部図書掛の附属図書館への統合に関する必要な事項についての申し合わせ」の文書の付記の第12項において、スラブ研については次のように記されている。すなわち「スラブ研究施設については、原則として同一歩調をとることが望ましいが、現状では種々問題もあるので、ただちに結論をだすことが困難である。したがって将来に向かって努力することとし、今回の統合と分離して処理する」。

12　この間の事情を筆者は当時の責任者今田事務長（現在北海道情報大学事務局長）にお伺いした。以下はその経緯の要約である。
「1974年4月、法学部の今田事務長(在任期間1970年4月から1977年3月末)に斉木附属図書館事務部長から文系図書室と附属図書館との統合の申し出があった。今田事務長は大学図書館の教育と研究の基本的な目的の実現と、今後の図書の増加、それにともなう書庫スペースの問題、定員削減・定員不補充等の現実的な諸問題に対処するためにも統合は合理的な措置であるとの判断に基づいてこの申し出を受けることにし

た。

さらに今村図書館長からこのことを文系各学部に要請するようにとの依頼があり、各学部事務長を訪問して統合問題への協調を要請した。しかし各学部の事情や事務長の考えもそれぞれ異なっており、同意を得るには至らなかった。そこで法学部がその先鞭をつける以外にないと考え、図書職員と具体的な検討に入ることになった。この問題は図書職員が納得しなければ実現することは難しいとの判断から、統合問題懇談会が再三開かれることになった。会を度重ねるうちに、明らかになってきたことは「総論賛成、各論反対」ということで、討論は結論を見ることなく暗礁にのりあげた。今田事務長は現状の膠着状態を打開するべく冷却期間をおくことにした。法学部内部においては、この統合問題は当時の三代にわたる薮・石川・小暮法学部長、山畠図書委員によってよく理解され、支持され、すべて事務長に一任したかたちで時間の経過を見守っていたようである。そのうちに4年が過ぎようようとしていた。1975年3月、学内に今田事務長の人事移動のうさわが流れはじめたため、斉木図書館事務部長は、附属図書館と法学部図書室の統合の実現を改めて今田事務長に要請した。この時今田事務長の法学部の在任期間はすでに5年に達しており、このように長期に1学部の事務長としてとどまることは異例のことと思われた。今田事務長は長い間宙に浮いたままになってた統合問題には充分に時間をかけたとの判断から、決着をつけるべく動きだした。図書職員を1人、1人呼んで意見を聞き、さらに移動の希望があればその実現にも努力することを約して、統合実現にむけて各自を説得していった。図書職員全員の了解のあとに残ったものは、法学部教授会におけるこの問題についての報告事項のみであった。しかし法学部教授会でも、賛成・反対入り乱れ、「総論賛成・各論反対」の論理で一元的な賛成は得られなかったが、今田事務長は「この問題は、教授会の審議事項ではなく、事務長の権限下の事務的問題である」と主張し、この場における問題の審議を避けた。かくして5年の歳月をかけた法学部図書室統合問題は決着し、1975(昭和50)年4月1日付けで統合は実現した。この場合、「事務長の仕事は、大学における研究と教育を支えるために支障のないよい環境を作ることである。図書室の統合問題はいわば研究と教育の環境作りにかかわるものであり、事務長の仕事である……」というのが事務長の論理であり、事務長の仕事の分掌による権限の範囲内のこととして理解されていた。

以上は今田事務長からの電話の聞き書きによるものである。ご多忙中にもかかわらず、快く率直にいろいろお話くださった同氏に深く感謝するものである。もし内容に誤解や誤認があればそれは筆者の責任である。

13 拙稿「スラブ研究施設図書室報告(1971) ── 大学図書館の集中管理制をめぐって」『スラヴ研究』No. 16、1972年、280-283頁。

14 スラブ研では国内のスラブ関係研究者名簿の作成を強く望んでいたが、そのための予算がなかったので、窮余の一策として科学研究費で『わが国におけるソ連・東欧研究の動向』と題して刊行した。

15 その後1976年にはポーランド語講習会中級（伊東・菅原ドロータ）及びポーランド語講読会（伊東）が継続して開かれた。

16 『ソ連東欧研究文献目録』1976～1988。1989年版は『スラブ東欧研究文献目録』と改題され、1990年以後は〈スラブ東欧研究文献データベース〉としてコンピュータに入力されている。

17 現在スラブ研の参考図書室にあるものは、レンセン・コレクションの一部である。当時購入したものは大部分が布製の表紙でかなり破損しているため、レンセン・コレクションの中の『ブロックハウス・エフロン百科』と入れ替えて、レンセンの著作とともに記念としてスラブ研に保存されている。

18 前者2つのコレクションに関しては、冊子目録 *Russia and Eastern Europe: a List of the George Vernadsky Collection*. Sapporo, 1982. と *Boris Souvarin Collection on Russian Revolutionary Movements*. Sapporo, 1980. がそれぞれ刊行されている。

19 これらのコレクションについては『楡陰』No. 50、1984年、4-8頁を参照。

20 ホレツキー夫人を講師に招いてスラブ研と法学部事務室の職員のために英会話講習会が開かれた。

21 拙稿「レンセン・コレクションについて」『スラヴ研究』No. 28、1981年、123-126頁。「北大のレンセン文庫」『北海道新聞（夕刊）』1981(昭和56)年9月2日参照。

22 わが国では一般には考えられないことであるが、世界的な学者の報告にまじって図書関係の研究報告・図書館の紹介・諸問題についての討論などが学会プログラムの中に組み入れられていた。このようにして世界中のスラヴィック・ライブラリアンの交流も生まれ、ライブラリアン同志のネットワークも形作られている。筆者もはるばる日本から来たということで、早速スラブ研究センター図書室についての報告を求められた。Takako Akizuki, "The Slavic Research Center Library, Hokkaido University, Sapporo," *Access to Resources in the '80-s: Proceedings of the First International Conference of Slavic Librarians and Information Specialists*, ed. by Marianna Tax Choldin, New York, 1984, pp. 50-53 参照。

23 *The Collection of Leon B. Bernstein*. Vol. 1-2. New York, Russica, [198-？] 長谷川毅「ベルンシュタイン・コレクションを手にして」『楡陰』No. 65、May 1985、9-11頁。「日本におけるロシア・ソ連研究とベルンシュタイン・コレクション」『北大時報』1986、7月、22-24頁参照。

24 *Acta Slavica Iaponica*, I, 1983, pp. 15-164.

25 Jun Matsuda, "Bibliometrical Survey of Japanese Slavic and East European Studies: 1976-1980"; Takako Akizuki, "The Slavic Research Center Library since 1980," *Proceedings of the Second International Conference of Slavic Librarians and Information Specialists*, ed. by Marianna Tax Choldin, New York, Russica Publishers, 1986, pp. 370-385; pp. 292-294. を参照。

26 この時のすべての報告は、Marianna Tax Choldin ed., *Proceedings of the Second International Conference of Slavic Librarians and Information Specialists*, New York, Russica Publishers, 1986, pp. 386-505. に収録されている。

27 拙稿、「アメリカのスラブ関係主要図書館を訪ねて」『ソ連研究』No. 2、1986年、185-195頁参照。

28 この段階で図書情報の入力対象になっている言語は、日本語と主なヨーロッパ言語に限られていた。受入れ図書の半分以上がロシア語で占められているスラブ研究センターの現状を考えると、ロシア語図書はキリル文字で入力するか、アメリカやヨーロッパの図書館のように翻字によるかの決定がせまられた。この結論をすぐだすことは、諸外国の図書館の事情からも明かなように、非常に難しい問題であった。しかし筆者はコンピュータ化の初めにあたって、キリル文字による直接入力の可能性を探ることを強く望んだ。附属図書館情報課に相談したが、始めはとりあってもらえなっかた。しかしいろいろ話し合いを進めてゆくうちに、なんとか可能性の光が見えはじめ、山田課長との度重なる討論の末、同氏の努力によって端末から直接キリル文字を入力することが可能になった。この時ロシア語アルファベットを第1次計画とし、第2次に革命前に使用された4文字、ウクライナ語、白ロシア語、セルボクロアチア語などの特殊文字、第3次に旧ソ連邦の共和国の民族の諸言語に対応できるものを考えていた。しかし残念ながら、この計画が実現される前に同氏は東京工大に転出し、その後間もなく突然の急病で若くして故人になられた。図書分類法の専門家でもあった優れた図書館員山田常雄氏のご冥福を心からお祈りしたい。

29 『スラブ研究のための提言 ── スラブ研究推進の方法検討会の記録』1987年7月－1988年1月。『スラブ研究センター報告シリーズ』No. 26、1989年参照。

30 拙稿「レニングラード科学アカデミー図書館（BAN）の焼失」『スラブ研究センターニュース』No. 33号、1988年、8-9頁参照。これについては、同図書館にゆかりの深い保田孝一氏が「レニングラード科学アカデミー図書館の火災・その後」と題して『スラブ研究センターニュース』No. 36、1988年、6-7頁に追加記事を寄せている。

31 前者の会議においては、国際図書交換の現状と問題点、及び図書業務の機械化が大きな主題であった。筆者もスラブ研における現状報告を求められた。この会議で一番驚いたことは、ソ連から沢山のライブラリアンが参加したことであった。拙稿：「International Slavic Librarians' Conference (ISLC)」『スラブ研究センターニュース』No. 43、1990年、12-16頁参照。

32 『スラブ研究センターニュース』No. 45、1991年、9-[18]頁参照。

33 拙稿：「ソ連8月革命後の新聞紙名 ── とくにサブタイトルの変更について」『スラブ研究センターニュース』No. 47、1991年、20-22頁。「新顔の購入新聞・雑誌」『スラブ研究センターニュース』No. 49、1992年、11-13頁参照。

34 「ユーゴスラヴィア関係資料紹介」『スラブ研究センターニュース』No. 46、1991年、15-22頁参照。

35 「チェコ語図書の寄贈」『スラブ研究センターニュース』No. 48、1992年、16-17頁参照。

36 拙稿：「旧ソ連共産党文書マイクロフィルムの販売」『スラブ研究センターニュース』No. 50、1992年、14-16頁参照。

37 「モジェイコ教授の提言〈センターの受入れ図書について～ポーランド、ブルガリア、ユーゴスラヴィアの文学を中心として〉、その2〈チェコとスロヴァキア文学〉『スラブ研究センターニュース』No. 47、1991年、17-20頁、同No. 48、1992年、11-15頁参照。

38 橋本聡「詩による20世紀チェコ文化の解読（新着図書紹介）」『スラブ研究センターニュース』No. 55、1993年、10-15頁。

39 拙稿「キエフへの旅」『スラブ研究センターニュース』No. 56、1994年、14-19頁。

40 スラブ研図書室の寄贈・交換図書の現状については、拙稿「寄贈図書受入れの現状」『スラブ研究センターニュース』No. 59、1994年、18-22頁参照。

41 Takako Akizuki, *A Descriptive Guide to Russia-Related Research Materials at Hokkaido University: Individual Collections and Russian Language Microform Materials*, Sapporo, 1993, pp. 66.

42 拙稿「ボリス・ニコラエフスキー・コレクションについて」『スラブ研究センターニュース』No. 58、1994年、19-21頁。

43 Ando Atsushi, Urai Yasuo, Mochizuki Tetsuo, *A Concordance to Dostoevsky's Crime and Punishment*, vol. 1-3, Sapporo, 1994.